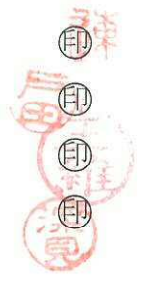


## 論文審査の結果の要旨

報告番号	博（水・環）甲第72号	氏名	涼松育子
学位審査委員	主査 連 清吉 副査 戸田 清 副査 王 維 副査 深見 聡		
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>涼松育子氏は、2018年4月に長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士後期課程に進学し、現在に至っている。同氏は、水産・環境科学総合研究科に進学以降、環境海洋資源学環境科学を専攻して所定の単位を修得するとともに、東アジアにおける「龍舞」の民族的音楽性に関する研究に従事し、その成果を2020年12月に主論文「中国における龍舞の役割とその音楽—日本の龍舞との比較を通して—」として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文2編（うち審査付き論文2編）を付して、博士（学術）の学位の申請をした。長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授会は、2020年12月16日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2021年2月17日の水産・環境科学総合研究科教授会に報告した。</p> <p>本研究は、日本と中国の龍舞の音楽に着目し、日本の龍舞との比較を通して、中国の龍舞における音楽の位置づけを考え、中国龍舞における音楽分析、日本龍舞と中国龍舞における音楽比較とその可能を探ることを目的としている。</p> <p>現代中国における龍舞の実態として、「文化資源」、「教育活動」、「競技」の3つを考えられる。龍舞は、「中国民族の芸能」として、国策において「中国人民を一つにするための芸能」として機能している。また、遺産として認定されることで、芸能自体に真正性を得ることができ、それによって、その遺産を見にこようと人々を呼び込み、文化資源としての機能も果たしている。また、龍舞は、中国の「民族伝統体育」の一つに数えられ、単に中国の伝統文化を継承させていく意味合いだけでなく、龍舞を通じて、◎生徒の精神面にも影響を与えていくもの、またそのような機能をもっているものとして位置づけられていると考えられる。さらに、競技としての舞龍は、使用する器具などの規定、また技に関しても規則や点数配分が設けられるようになった。規定ができたことによって、中国という国としての龍舞、また競技の舞龍を確立すること、他の国で華僑・華</p>			

人が行っている競技や大会に参加することができるという意味合いができた。競技化することによっては、本来的な龍舞の意味合いが薄れ、競技舞龍という新たな舞龍の誕生につながっているとされた。このように、現代において付されてきた3つの価値は、社会的な背景との結びつきの中で新たに確立されていった。中国という国の中において、「遺産」とすることで、各地域の龍舞、また中国の龍舞ということが明文化された。伝承の継続のためにも、教育現場で教育的意義を持たせ、団結力も培う芸能として機能してきた。そして、競技となったことによって新たな舞龍が作り出されました。国際大会なども行われ、世界的に舞龍運動を促進する役割をもつようになってきたと考えられる。

日本における龍舞の実態とその役割を考察には、横浜、神戸、長崎の龍舞について取り上げる。横浜の龍舞とその音楽は、リズムが比較的単純な8小節の音楽1つで構成されている。神戸は、競技化された龍舞であり、龍獅團の音楽は、この龍の動きにこの音楽というように、一つ一つの龍の動きに合った音楽が使用された。楽器も、小包、リバースと呼ばれるシンバル類、笛、小銅鑼、大銅鑼、太鼓、銅鑼、スタンドシンバルなど多くの楽器を用いて、音色に変化を出していた。長崎は、他の二都市よりも中国との長い歴史をもっている。その長い歴史の中で独自に変化し現在は日本人によって伝承されている。外観だけでなく、長喇叭などの長崎独特の楽器を用いることも特徴である。龍踊の音楽は、2つの唱歌で言い表される音楽から成り立っています。長崎くんちの踊町だけでも4つあるが、それぞれが聞こえてくる音楽は同じでも、各団体によって使用される楽器のリズムが異なり、それぞれの独自性を出していた。これは、長崎の龍踊が伝統文化として認識されており、龍踊が長崎の芸能という意味合いをもって披露されてきたからだと言える。

中国龍舞における音楽分析に関しては、教育活動における龍舞では、打楽器が中心となる。競技においては、選択した音楽が国家と民族の特色と音楽のリズムと舞龍動作のリズムが一致することが要求される。地方の龍舞は、2019年の2月に調査にいった上海崇明島の江南三民文化村における龍抬頭での龍舞の様子を対象とした。自分たちで演奏することは殆どなく、CD音源に合わせて踊る。音楽を採譜して検証すると、CDの音楽であっても、大きくみた場合、◎音楽やリズムが切り変わる部分で龍の動きも変わっていることが分かった。

日本の龍舞と中国の龍舞の音楽について、中国においては、楽器の中でも打楽器が基本的な拍をとり音楽の基礎となり、そして、旋律楽器が地域性を表す役割を果たした。音楽全体が龍の動きとの一致を求められ、打楽器のリズムが演者にとっての動きが変わる切り替えともなっていた。日本の横浜では、比較的単純な音楽構造を幼少期から大人まで用いた。神戸では、競技性をもって龍舞を行っていることもあり、動きごとにそれぞれ音楽が切り替わっていた。長崎では、これら2つの都市とは異なり、古くに中国から伝えられたものが日本人によって伝承され、長崎独自のものとなっていた。特に、使用する楽器それぞれに音の意味があり、雨乞いの儀式を表現するものとなっていました。

以上を踏まえて、本研究は音楽の可能性を示すべく、3つの龍の動きに合わせた音楽を作曲した。作曲の際は、教育現場でも使用できるよう比較的単純なリズムで構成すること、また拍や龍の動きの切り替わりが演者また観ている人にとってもわかりやすくなるようにすることの2つを念頭に置いてきた。とりわけ8字を描く動きと円を描く動きに対応するような音楽を作成した。この動きは、中国において、最初に取り組みることが多いとされていたため、音楽も銅鑼、小鑼、鈸の簡単なものにした。円を描く動きというのは、龍が円を描くように1周する動きであり、中国の龍舞、また日本で行われている龍踊を含めた龍舞全てにみることができる動きである。4分の4拍子で作成し、太鼓が拍を刻む指針として2小節を1パターンとして、演者にとっても、切り替わりがわかりやすいように作成した。鈸も太鼓に対応するようにしていますが、2、4、6小節目は表拍だけを演奏し、表拍を強調するようにしている。小鑼は、独特の中国的な響きを表現するために取り入れた。また、中国の京劇などの音楽にもみられる、裏拍を強調し、音楽に変化を与えている。板鼓は、長崎のパラパラ太鼓であり、雨の音を表現している。このパートも、太鼓と同じように2小節を1パターンとして作った。長喇叭は龍の鳴き声を表現するために取り入れている。これらの楽器を取り入れたのは、本来は雨乞いの儀式であったことを音楽でも表現するためである。また、この曲は旋律楽器を入れたことが特徴的である。旋律楽器を入れることで優雅さを出した。また、D調で5音階を使用することにより、中国的、また民族的な響きを出すようにした。そして、8小節目では、次の動きとの切り替わりとなるように、全ての楽器がリズムを変えることで、切り替わりを示すようにした。

このように、基礎となるリズムや役割を明確にすること、また一つ一つの楽器のリズムは単純でも様々に組み合わせることで、その龍の動きにあった音楽を作成することができると考えられる。

以上のように本論文は、「龍舞」の文化的意義を論考し、「龍舞」の音楽に関する中国、長崎、神戸、横浜の相違を究明すると共に、長崎の和華蘭の文化的要素を踏まえ、日本と中国の伝統的楽器および西洋の弦楽器を取り入れて、新たな「龍舞」を編曲するところは評価され得る。その成果は中日民俗芸能音楽研究の樹立に多大の寄与をするものと評価できる。

学位審査委員会は、中日民俗芸能の分野において極めて有益な成果を得るとともに、中日文化芸能の伝播および民俗音楽の進歩発展に貢献するところが大きく、博士(学術)の学位に値するものとして合格と判定した。